様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年　３月　２７日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>講師</td><td>氏 名</td><td>周防　美智子</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">児童生徒の抑うつ状態と問題行動　―追跡調査（4 年目）による検証―</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>分担者</td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">1. 研究目的・方法
近年の児童生徒の問題行動増加に対し、問題行動の要因を明らかにすることが急がれる。児童精神医学領域では子どもの問題行動を抑うつの視点から検討することが必要だと指摘している。そこで、筆者は2009年度から2013年度にかけ、問題行動を抑うつの視点から検証してきた。そして、2014年度から、これまでの研究結果を発展させ、児童生徒（小・中学生）の抑うつ状態と問題行動の関連が環境や発達年齢の影響によってどのような変化を表すかを検証し、抑うつ状態と問題行動の改善に向けた支援を検討するための追跡調査を開始した。
本研究は、2014年度調査の小・中学生を今年度追跡調査し、抑うつ状態と問題行動の実態把握と検討を行った。調査は、Birlesonの子ども用自己記入式評価尺度（DSRS-C）と、教師の行動評価（①行動が年齢より幼い、②座っていられない落ち着きがない、③やってはいけないことをしても悪いと思わない、④暴言や暴力がある、⑤物を壊す、⑥学習意欲がある、⑦休み時間の友人交流がある、⑧学校生活全般に元気がある、8項目）を質問紙で行った。DSRS-Cは、フルスコア36点でカットオフスコア16点以上を抑うつ状態とする。対象は、A県3小学校の児童1年生から6年生1,692人と1中学校の生徒1年生から3年生792人および担任81人である。調査は、6月と12月に2回実施した。分析は分析ソフト（SPSS20.0）にて、有効回答（小学生1回目1,664人・2回目1,630人、中学生1回目792人・2回目772人）を対象に行った（表1）。本研究は、岡山県立大学倫理員会の承認を受けている。

2. 結果
小学生の抑うつ状態は、全児童の 1 回目は 9.9%に、2 回目は 12.9%に見られた。 1 ・2 回とも性別や小学校の差はほとんどなかった。 1 回目 2 年生の抑うつ状態は他学年に比べ少し高い状態であった。1 回目と 2 回目を比較したとき抑うつ状態の割合は、ほとんどの学年で 2 回目が高くなっていたが、とくに 1 年生では 1 回目の 2 倍になっていた（表 2)。
中学生では、学年、性別ともにほとんど差はなく、1 回目は全生徒の 14.4%が 2 回目は 19.3%が抑うつ状態であった。中学生では、全学年において 2 回目の抑うつ状態の値が高くなっていた（表 2)。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要

また、問題行動について出現の割合（%）を、抑うつ状態の有無で比較すると、1・2 回とも抑うつ状態の小学生は抑うつ状態でない児童の約 2～3 倍の出現である。中学生においては抑うつ状態の有無にかかわらず問題行動は、行動評価①から⑤の出現はほぼ同じであった。しかし、⑥と⑦については抑うつ状態の中学生は抑うつ状態でない生徒の約 3 倍、⑧においては 1・2 回とも 10 倍以上という結果が出た。小学生と中学生では抑うつ状態による行動の表出に違いが見られた。また、昨年度抑うつ状態を示した小・中学生のうち、約半数近くが今年度の 1 回目調査に抑うつ状態が表れていた。1 回目抑うつ状態の小・中学生のうち 2 回目も抑うつ状態を示した児童生徒の割合を表 3 に示した。小・中学生の抑うつ状態と行動の相関分析を表 4 に示した。

表 1　分析対象者の内訳（人）

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中２年	中3年
1回目	255	252	265	284	296	312	271	255	266
2回目	249	255	264	287	266	309	263	247	262

表2　DSRS-Cの得点が抑うつ状態を示す小・中学生（%）

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中２年	中3年
1回目	9.4	13.9	10.2	9.9	7.1	9.6	14.5	13.3	15.4
2回目	20.1	12.9	12.9	12.8	11.7	8.4	17.5	19.4	19.3

表3　1回目調査抑うつ状態のうち2回目調査も抑うつ状態を示す小・中学生（%）

小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
57.9	33.3	44.4	75.0	47.3	40.0	48.7	72.7	72.5

表 4　抑うつ状態と行動の相関分析

		行動①	行動②	行動③	行動④	行動⑤	行動⑥	行動⑦	行動⑧
抑うつ状態（1回目）	小学生 N=1,664	.123**	.069**	.083**	.069**	.034	.078**	.142**	.078**
	中学生 N＝792	.011	－.014	.041	.047	.006	.138**	.162**	.166**
		行動①	行動②	行動③	行動④	行動⑤	行動⑥	行動⑦	行動⑧
抑うつ状態（2回目）	小学生 N=1,630	.105**	.040	.071**	.076**	.063*	.050*	.173**	.118**
	中学生 N＝772	-.019	－.008	-.012	-.018	-.019	.117**	.176**	.197**

表内の数値は相関係数を示す。**p＜.01、*p＜.05

現在、上記結果を基に考察を行っている。さらに、児童生徒の現状（経済状況、児童虐待、家族の課題、いじめ、発達課題、学力課題）が、抑うつ状態や問題行動に影響しているかどうかについて、抑うつと問題行動への影響についても検討を行っている。

成果資料目録	平成29年度　学会発表および論文投稿予定